

宮崎汎会員が見た世界の旅・第2部人物編第9話

ベトナム建国の父 ホー・チ・ミン

1991年バンコクで開催されたアジア生産性会議が終わり、引き続きベトナム戦争終了後の実情視察のためホー・チ・ミン市（旧サイゴン市）タンソンニャット国際空港に降り立った。

アメリカの経済封鎖（1979年～1995年）がいまだ解かれておらず、広大な空港は草ぼうぼうで荒れ果て、乗ってきたタイ航空機ただ一機しか駐機していない。

ベトナム戦争は当初、フランスの植民地（1887年～）支配から、独立するため立ち上がったベトナム共産党（ベトミン）との戦いに端を発した。これが第1次インドシナ（ベトナム・ラオス・カンボジア）戦争である。ベトナムが独立を勝ち取りフランスの撤退で平和に向かうとみられていたが、南ベトナム政府の支援をしていたアメリカが、北ベトナムの共産勢力がアジアに拡散していくことに危惧を抱き、第2次インドシナ戦争（ベトナム戦争）へと突き進んだ。



戦いは東側のソ連（現ロシア）や中国など共産圏の支援を受ける北ベトナム共産勢力とアメリカを中心とする反共産主義同盟、いわゆる西側との凄惨な戦いとなり、1955年に始まり、1975年のサイゴン（現ホー・チ・ミン市）陥落まで続く泥沼戦争だった。長引くベトナム戦争は、やがて反戦運動となりアメリカはじめ諸国でも大きなうねりとなった。日本でもベ平連などを中心とする平和を求めるデモや大規模な集会で世論は大いに盛りあがった。

ホー・チ・ミン胸像 ベトコン（南ベトナム解放民族戦線）は北ベトナムの指導により結成され、南ベトナムの政府軍やアメリカ軍にゲリラ的な攻撃を加え、多大な損害を与えベトナムの南北統一に貢献した。戦争終結後ベトコンは北ベトナム軍に併合された。

南ベトナムを制圧した北ベトナムの指導者ホー・チ・ミン（1890年～1969年）は、フランス植民地からの独立を果たし、さらに南北ベトナムの統一の指導者としてベトナムでは、建国の父、国民の父として誰からも敬愛された。

1991年経済封鎖の最中訪れバスから降り立ちホテルに入ると窓や入り口に日本からの視察団を一目見ようと大勢がたむろしていた。路上ではタバコのばら売りやコーラ1本だけ売っていた。フランス植民地の名残かフランスパンは非常に美味しく人気の品で路上の至る所で立ち売りがいた。道端でペットボトルに色付きの何かを入れて売っている、一同の疑問にガイドはガソリンを売っているのだと苦々し気に答えた。記憶を手繰っても当時ガソリンスタンドは目にはいない。ベトナム側の手配で市内の精米所へ案内された、日本の四国の精米機メーカーからの輸入機械だと



説明があった。この責任者は年を取った女性で、かつてはホー・チ・ミンの世話係であった有名な女傑だと聞いた。日本の優れた機械でどんどん精米し米を輸出して国家に貢献するのだと意気さかんなお婆さんだった。

次いで戦争博物館に案内された。武器やパネルの展示にはまだ冷静でいられたが、アメリカが撒いた枯葉剤が原因で奇形となった胎児のホルマリン漬けの部屋では最初何の展示か判らず4歩6歩と歩んだ、10歩ほどでようやく何が

ベトナムの女傑

展示されているかに気づき表に飛び出してしまふ。暑いのに身震いがしばらく止まらなかった。次いで南ベトナムの大統領官邸へ案内された。官邸内部は大統領が映画を楽しむ映画館・娯楽室など贅を尽くした施設で、大勢の犠牲者を出した戦乱の最中、大統領はこんな暮らしをしていたのかと一同ため息をついた。

バスに揺られ市外のクチにあるベトコンが掘ったトンネルへ向かった。案内役は戦争当時の軍服を着た、元ベトコンだったという小柄な男で、彼は一行を近くの熱帯雨林へ連れて行った。そして男は突然立ち止まった。一行を押しつけ歩いてきた細い道にしゃがみ込み落ち葉をかき分け板切れを持ち上げた。すると地下へ降りる低い階段があり一同について来いと先導する。地上を歩いているのは、まったく入り口は判らない。トンネルは長く中には台所あり、会議ができる広間あり、時には落ちたら串刺しになる仕掛けがある落とし穴を覗くなど身をこごめながら30分間トンネル内を案内された。



元ベトコン



旧南ベトナム大統領官邸



ホーチミン市の中心

ベトナムは1991年に訪れ、その後10年を経た2002年、さらに2009年、2011年といずれも公務で訪問した。ベトナムは行くたびに経済的に大きな躍進を遂げていて、人々の暮らしは豊かになり、町を歩いていると目が合うとにっこり笑うなど、最初に訪れた時は笑わない民かと思ったほどかたい表情であった。経済的なゆとりが増すに従い国も人も南国本来のゆったりとしたいい雰囲気を醸している。

日系企業の工場現場を訪れる機会があった。政府主導の工業団地の造成が急ピッチで進められ、勤勉で優秀な人材を抱えるベトナムへはキャノン・パナソニック・味の素など日本の大手企業の工場進出も盛んで工業立国への道をまっしぐらといった印象である。

経済・商業の中心地である南のホーチミン市と比べ、北部の都市ハノイ市は緑色濃い落ち着いた行政中心の都市である。ハノイ市内にはいくつも大きな湖水がある。その一角にうっそうとした緑に囲まれた静寂の地に建国の父ホーチミンの居宅があった。1階は吹き抜けでテーブルが置かれ会議室となっている。2階が私室で書斎とベッドルームだけの簡素な住まいであった。



ホー・チ・ミン氏の居宅

2階建ての簡素な家

1階は風通しのいい会議室

今では公開されていて誰でも訪れることができるので、建国の英雄の住まいを一目見ようと見学の人並みは途切れることが無い。居宅の周りは背の高い樹木に覆われ近くには果樹園などありゆったりした空間である。

旧ソ連のレーニン廟の影響であろうか亡くなった後に遺骸に化学処理を施し、人々に公開している国がいくつかある。例えば中国の毛沢東、トルコ建国の父ケマル・アタチュルク、撤去してしまったがブルガリアのゲオルギー・ディミトロフ大統領、北朝鮮の金日成と金正日親子などであるがベトナムのホー・チ・ミンもハノイの広大な広場に衛兵に守られ遺体は永久保存されている。



ハノイ市のホー・チ・ミン廟

南のホーチミン、北のハノイとも活気があって以前は無かった瀟洒なレストランやコーヒーショップができ、絵や刺繍を商う店、洒落たブティックさらに宝石店や愛玩動物や金魚屋さえ店を構えている戦時下では目にはできなかった平和な街の風景である。朝市や路上を野菜や果物、生花など色とりどりの品物を天秤棒で担ぎ商う女性などが行きかうのどかな風景である。これが平和なベトナム本来の姿であろう。(2011年)

参考

下記は「インドシナ3国を訪れて」より抜粋

日本生産性本部 宮崎汎記

先頃社会経済生産性本部は、インドシナ3国へ地域経済の活性化の促進を目的とする使節団を派遣した。同地域は経済産業省が対アジア産業政策の新重点地域と位置づけている国々である。各国の政府要人との会談や生産性シンポジウムの開催を通じ、改めて日本に寄せられている期待と役割の大きさを実感した。

ベトナムの活況

12年ぶりに訪れたベトナムは、予想をはるかに超える活況を呈し、2001年の経済成長率は7.1%と周辺国に比し突出した経済社会の発展過程にある。記憶の糸をたぐると自転車・アオザイ・物乞いといった事柄がまず思い浮かぶが、現在のハノイは近代的なビルが建ち、インフラも急速に整備されつつある。新空港や郊外に広がる小規模工場、車やバイクの洪水、種種雑多な商店など旅行者の目で見ると、戦争の爪跡は跡形もない。12年前には人民政府要人が私達のミッションに向かい、ベトナム経済を阻害する最大のネックは電力不足にある、日本の援助に期待したいと強く訴えていたが、あれからわずか12年、街にはネオンが灯り、いまやベトナムは電力をはじめとする膨大なエネルギー消費国に変貌を遂げている。街には物が溢れかえっているが、しかし車やバイクなどの部品、あるいは建築資材である鉄パイプや鉄骨製品などは、中古品が大方で新品は見当たらない。また以前訪れた時には目にする事のなかった、花屋とか金魚屋、小鳥屋さらには宝石店なども街中で見かけた。市民生活がそれだけ物心ともに満たされつつある証左であろう。

(2002年)

レビュー・コラム

宮崎 汎 (社会経済生産性本部
情報化推進本部長)



間もなく8月15日の終戦記念日がやってくる。そしてまた、苦い思いを噛みしめることになる。大連生れの私は7歳の時、戦乱のさ中父親を亡くし、引揚げてきた。母はことあるごとに、戦争さえなければ、とつぶやき続けてきた。以来、戦争に対し、深い悲しみと強い憎しみを、今日に至るまで抱き続けている。

齢50を越え、初めて長崎や広島を訪れ、原爆の恐怖を記念館の写真や遺品で知った。また、沖縄をたずね、牛島中将自決の壕やひめゆり部隊の悲惨な最後に、泣きながらみた映画の場面をダブルせながら、ひたすら手を合わせた。1963年に初めてアメリカを訪れた。ハワイ経由である。真珠湾に沈む戦艦アリゾナに案内された。私をみて小声でジャップという蔑視の声が一度ならず聞こえた。あこがれの島ハワイに浮かれていた気分は一瞬にしてしぼみ、逃げるようにそこを離れた。1987年、戦後初めて中国各地を訪問する機会を得た。

旧日本軍のさまざまな残虐行為に対し、中国の人々の恨みは深く、決して許してはくれまいと覚悟して出かけた。ところが、いたるところで心からの暖かいもてなしを受け、心配は杞憂に過ぎなかった。中国人の度量の大きさを知るとともに、日本人の一人として恥ずかしく、再び狂気をくり返してはならない、と自分にいいかさせた。

ところで、戦争の記憶をよび覚すものに、二つのパターンがある。一つは「戦勝」を記念するもので、どこの国にもさまざまな型で存在する。二つ目は、ノーモアや、ドント・リメンバーに象徴されるように、戦争は狂気だ、無意味だ、もう沢山だと人間の心に強く訴えかけてくるものである。そのきわめつけの例は、ポーランドやベトナムにみることができる。

ポーランドのアウシュビッツは先頃、ユネスコの世界文化遺産保護条約により永久に保存されることに決したと聞く。アウシュビッツは、世界各

地から訪れる人々でにぎわっている。有名な「働けば自由になれる」として作られた入口の遮断機をくぐると、そこは無気味な別世界である。ぞくりと鳥肌がたつ。沢山の見学者は、とたんにいずれも無口になる。高圧電流が流れていた有刺鉄線に厳重に囲まれている広い敷地の中は、忠実に当時の面影を伝えている。道路際に太い柱に支えられた鉄骨の梁がある。疲れてその柱に背をもたせかけた。それはみせしめに首をくくられた人々が吊されていた柱だと聞かされ、思わずとびすさる。28棟ある建物のいくつかに入る。眼鏡の山、靴の山、その数は尋常な数ではない。死者の怨霊が冷氣となって伝わり身をふるわす。あわてて先を行く友人の後を追った。恐怖の頂点は毛髪である。二教室分もあろうかと思われる広い部屋に、うっそうとある灰色一色の髪の毛の山である。毒ガスで一様に変色したのだ。この想像を絶する髪の毛の分量は、何千人いや何万人の犠牲者のものだろうか。次に天井に小さな穴がいくつかあいているコンクリートのガランとした小ホールに入った。何の変哲もないので外に出ようとした。ガイドからこれが悪名高きガス室と聞かされ、思わず息をつめる。隣室は赤レンガの人間焼却炉だ。熱で黒くすすけている。この部屋には色とりどりの花が供えられ、人々がひしめきあって、ひどい混雑ぶりである。だが誰も口をきかない。私はこの年になるまで、こんな恐ろしい体験をしたことはない。人間の残忍さに身の毛がよだつ。ここから3キロにある、ビルケナウ強制収容所も見学できた。広大な敷地に、赤錆びた鉄道線路が一すじ引き込まれている。当時、牛馬以下のあつかいで各地から送られてきた人々の、文字通りの終着駅である。朽ち果てた木造の建屋の跡がみわたす限り続く敷地の中は、今も人骨のかけらが散らばって

いるという。保線工夫がたった二人、遠くにポツンと見える。決して再び列車が走ることはない線路の保守をしている。この忌わしい歴史の一頁を、永久に子孫に教訓として伝えるための作業である。

東洋にも戦争の恐ろしさを人々に伝える博物館がある。旧サイゴンを訪れる人達が必ず案内される「戦争博物館」である。兵器弾薬の類には、さして驚きもしなかったが、うだるような暑さの中で、寒む気を覚えたのは、枯葉剤などの影響で恐ろしい姿で生れてきた、奇型児のホルマリンづけの数々である。背中から手首が突きでている……。私はウァーと思わず悲鳴をあげ、ギラギラ照り輝く太陽の下にとび出した。身心共に脱力感でぐったりしてしまう。しばらくして気持が落ちつき、次に猛然と怒りが湧き上ってきた。「戦争許すまじ」である。

戦争という狂気の世界へひた走るような可能性は、たとえ万分の一でも、人間の持てる英知の全てをかたむけ、断固阻止すべきだ。残念ながら、紛争や局地的な戦争行為はまだ止まない。小さな火種が徐々に燃えさかり、仕舞いには爆ぜる。憎しみはエスカレートしていく。憎しみの火種は、人間の理性ですばやく消しさらねばならない。私達にはアウシュビッツやサイゴンのような悲劇的な人類の負の遺産がある。世界中の為政者や各界のリーダーたるべき人々の資格要件に、この遺産を実際に見聞することを義務づけるのはいかがであろうか。人類の愚行の残した恐ろしさに、悲鳴をあげることから、まずことは始まるのである。20世紀は、有史以来最も多くの人間が殺し合いで命を落していった。新しい世紀は、人類が渴望してやまない戦争のない平和を、何としても実現したいものである。